

満州国承認と日本学童使節

小学生による日滿親善の試み

是澤博昭

Recognition of Manchukuo and the Japanese Children's Mission : An Attempt to Establish Friendly Diplomacy between Japan and Manchukuo by Using Children of Elementary School Age

KOSESAWA Hiroaki

はじめに

- ①二つの少女使節答礼計画
- ②日本学童使節の成立
- ③日本学童使節の誕生
- ④東洋平和と国際化、日滿教育の提携
おわりに

【参考文献】

昭和七年六月下旬、満州国承認の気運を盛り上げるために満州国少女使節が来日するが、それに答えて民間の小学校教員団体である全国連合小学校教員会は、私設団体の立場から、教育親善の子供使節を提案する。

民間の教員団体の発案にはじまる親善計画は、新聞社の参入と国の協力のなか、民間交流という枠を越えて政官民が一体となったイベントとして一人歩きをはじめ、使節に選ばれることは母校や地域の名誉として、地方を中心に異常な盛り上がりを見せ、国民レベルで注目を集めるのである。

しかしこの計画の主宰者たちには、一九二七年の日米人形交流のように、お互いの国を対等に認めた上で、相互理解と世界平和をめざす子供達による親善交流という視点は無い。それは遅れた満州国が近代国家になるように日本が指導するという、上下関係の上で成り立つ平和と親善交流であった。

誕生したばかりの満州国を日本が守り育て、アジア人のためのアジアを建設するこ

とが東洋平和、そして世界平和につながるという意識を、多くの小学校高学年の子供達も共有していた。日本のアジア支配を正当化する国民的使命を自覚して、学童使節は承認されたばかりの満州国へ旅立ったのである。昭和七年の時点で、満蒙は日本の生命線^①という意識は、子供達の胸にもしっかりと刻み込まれていた。さらに「平和の使ひ」「純真なる十五名の使節」の語が踊るように、大人社会の謀略を覆い隠すために、子供というイメージの利用価値は、日滿の両政府をはじめ社会的にも浸透していた。

少女使節から日本学童使節までの子供による日滿親善交流をみるかぎり、満州への侵略を正当化する世論を盛り上げる文化侵略の手段として、一九三〇年前後に日本で大衆化した純粹・無垢という子供観は、官民を問わず国民的レベルで利用されたと言えるのである。

キーワード…日本学童使節、日滿親善、小学生、国民的使節、全国連合小学校教員会

はじめに

子供期は近代的な制度、つまり歴史の一時期につくりだされた社会的観念だが（フィリップ・アリエス）、近代日本の子供は、明治五年（一八七二）の学制の公布により、教育の対象として制度的に生み出される。このような教育（子供）観を人々が内面化しはじめるのは明治三〇年前後からであり、さらに明治末から大正期にかけて、子供を純粹無垢な守るべき存在とみるロマン主義的な子供観が見出され、子供は聖なる存在として過剰なまでに賛美される。このような子供のイメージは、大正七年（一九一八）創刊の児童雑誌『赤い鳥』を中心とする児童文学で確立されたことは周知のとおりだが、それとともに子供の世界を理解する人や子供好きな人は善人というイメージも形成される⁽²⁾。

本研究は、日本でこのような子供観が、平和・友好という語に結びつき国際紛争の醜さを覆い隠すイメージ戦略の一環として、対外宣伝や国際交流に意図的に活用される道筋を探ることを目的としている。

国際交流の主人公として女性や子供が登場を始めるのは昭和初期、つまり一九三〇年前後からである⁽³⁾。そしてその源流は、昭和二年（一九二七）のシドニー・ギューリックと渋沢栄一を中心とした日米人形交流にまで遡ることができるだろう。一九二〇年代の文化の特色は、大衆文化の発展とされるが、この頃をさかんに新聞・雑誌・映画などが人々の日常的な消費財となる。大都市を中心に発信されるこれらの文化情報は、全国一元的なコミュニケーション・チャンネルをつくりはじめ、爆発的な「情報」の加速度的な増殖と流通⁽⁶⁾がみられるのだ。そして雛祭り、新入学、七五三、クリスマスなどの消費イベントや子供用品の流行操作が本格化⁽⁷⁾し、大正中期以降には、新聞社が「婦人子供博」⁽⁸⁾（読売新聞社）、「こども博」⁽⁸⁾（大阪毎日・東京日日新聞社）などを主催するようになる。そし

て他のメディア・イベントなどでも、健康優良児表彰や文化事業など、子供が注目されはじめる⁽⁹⁾。おそらく一九二〇年代後半から一九三〇年代初頭にかけての純粹・無垢な子供というイメージの大衆化は、この文脈のなかで理解できるであろう。

例えば、昭和六年（一九三二）の満州事変をきっかけに軍部への批判的な態度から方針を転換した『大阪朝日新聞』（以下「大朝」）社は、総力をあげて同事変支持のキャンペーンを展開するが、ここでも積極的に子供を活用している⁽¹⁰⁾。挙国一致的なムードを盛り上げるために子供が平和や親善を訴える姿が有効な手段の一つであることを、マスコミや教育関係者は日米人形交流の成功体験をとおして学んだのである⁽¹¹⁾。

その後昭和七年（一九三二）三月の満州国建国宣言にともない、同年五月から六月にかけてその既成事実化を促進させるために満州国資政局から少女使節、同国協和会から女性使節が派遣される。ここでは満州国を指導援助する必要性を目に見えるかたちで大衆に訴えるために子供・少女、乙女（若い未婚女性）を主人公とした二つの使節が派遣されている。当時満州国内で対立していた資政局と協和会が、同時に対外宣伝のイメージ戦略として、社会的弱者である子供・うら若き女性を起用したのだ。そして新聞各紙は、連日両使節にかんする報道合戦を繰り返すが、報道をみるかぎり幼い子供の方が話題性に富み、注目されやすい存在であった。

満州事変から満州国建国・承認に至る時期に、純粹で守られるべき子供（幼児や少女・少年）やうら若き女性は、満州国建国の正当性に国民の関心を集める手段や部数拡大を視野に入れた新聞社等のキャンペーンに多用されるのである。すなわち、この頃社会や学校・家庭で保護され、教育をうける対象である純粹無垢な子供（いわゆる近代的孩子観）は、国民に好意的に受け入れられるテーマとなっていたのだ⁽¹²⁾。

満州事変を契機として新聞論調や国民意識に著しい変化が起るが、そ

の際満州での日本側の行動について、事実を歪曲した国民的規模の錯覚がつくりあげられる。そこに新聞が大きな役割を果たしたことは、すでに指摘されている⁽¹³⁾。だがこれらのイメージの形成は、政府や軍部、および満州国側からの広報活動とそれに迎合した新聞をはじめとするマスコミなどにより、上から一方的に大衆に刷り込まれた幻想、という構図だけでは説明できない。満州事変が関東軍の謀略という事実を知らされず、軍部の意図的な世論操作に協力したマスコミの報道におどらされたという一面は確かにある。だがたとえそうであったとしても、子供のもつ純粹無垢というイメージを平和・親善に結びつけ日本の満州侵略を積極的に支持したのは大衆であった。近代化の過程で形成された日本人の多くが共有する意識が、官民をこえ一体となって相乗効果を生み出し、幻想が加速度的に増殖された結果だ、と考えられる。

本稿では、それに一定の役割を担ったと思われる民間の教育関係者に注目する。少女使節の訪日から約三か月後に、小学校の教員団体が中心になり国やマスコミに働きかけて結成された「日本学童使節」が満州国に出発している⁽¹⁴⁾。これによって子供による日満親善交流が実現するが、その成立過程や目的に注目することで、平和国家満州国と正義の国日本というイメージが、子供という存在をとおして増殖される過程の一端にせまりたい。

①二つの少女使節答礼計画 — 満州国承認のために

(1) 学童使節への疑問

昭和七年九月一九日、少女使節に答えて、全国連合小学校教員会、大阪毎日新聞（以下…『大毎』）、東京日日新聞社（以下…『東日』）の主催で全国各地から選抜された一五名の小学生による「日本学童使節」が、

満州国に派遣されている。その目的は、外務省側の記録によれば「満州国少女使節ノ帝都訪問ニ対スル答礼ヲ兼ネ」「在満将士ノ慰問、戦没将士ノ慰霊：児童交歓ニ依ル日満親善⁽¹⁵⁾」をはかることであった。使節が発する四日前の九月一五日、武藤信義全権大使と鄭孝胥國務総理の間で「日満議定書」が調印され、日本は満州国を正式に承認する。さらに前日の一八日は満州事変勃発の一周年であった。

学童使節は、鳩山一郎文部大臣の「満州国少年少女へ」、永井柳太郎拓務大臣の「関東州の学童諸子に告ぐ」「親愛なる朝鮮の少年少女諸子に告ぐ」という、満州国と関東州・朝鮮の子供達へのメッセージを携えていた。そして執政溥儀夫妻や鄭國務総理をはじめ満州国要人に謁見し、武藤全権を訪問するなど、一行の訪問芳名録は合計七三八人、新京だけでも四一名が記されている⁽¹⁶⁾。『大毎』『東日』は、ほぼ連日のようにその動向を伝え、訪満中の使節からの書信や執政との会見の様子などニュースを独占している。その詳細は別の機会に譲るが、例えば、満州国文教科礼教司は、首都新京（現…長春）での子供による日満親善の成果を、次のように記している。（ただし（ ）は引用者…以下同じ）

（日本学童使節の）新京に於ける歓迎は予想外の熱誠を以て為され、駅頭に於ける送迎人は山の如く、其整理に甚だ困難を感じり。又國務総理、日本総領事代理は双眼涙を湛へて歓迎せられ、到处感激と喜びを以て盛大なる日満児童の交歓会を開催せり⁽¹⁷⁾

このように満州国の少女使節にこたえて、日本側が学童使節を派遣することで、子供による「日満親善」と満州国へのイメージの向上が、日本の大人たちにより演出されたのである。

ただしなぜ学童使節は、全国連合小学校教員会（以下…全教連）と大阪毎日新聞社、東京日日新聞社側との合同主催事業なのか。さらに学童

使節は民間レベルの親善使節でありながら、文部大臣や拓務大臣のメッセージを携え、政府や満州国の要人、関東軍の幹部などを歴訪し、各地で歓迎会が開かれたのか、全教連という組織の性格と『大毎』『東日』側の提携など改めて検証する必要があるだろう。そこでまず学童使節が結成されるまでの事情を明らかにしていきたい。

(2) 答礼少女使節―『大毎』『東日』のイベント計画

前述の満州国文教部の報告では、「全国小学校教員大会」で少女使節の答礼の意味をこめて「日本学童を満州国へ訪問」させ、その「純真なる童心を通じて日満両国の融和の実」をあげることを可決した。それと同時に「大阪毎日新聞社及東京日日新聞社も同様の意味を以て学童五名を満州国」に派遣する計画を発表した⁽¹⁸⁾。当初少女使節への答礼は、異なる二つの団体が同時並行で計画していたことがわかる。

昭和七年七月一日『大阪毎日新聞』朝刊一面には、右上の題字のすぐ下に、次のような大きな囲み記事が掲載されている⁽¹⁹⁾。

答礼少女使節 本社から満州国へ派遣 来る八月三日出発

日満親善の実を結ぶために新興満州国から可愛い少女使節が来朝し日本少女と固い握手を交しました。童心国境を越え第二の母たるべき日満少女の情誼美しい交歓は国交上最も意義深きものと信じます。本社並に東京日日は日満両国の遠き将来のため一層友愛の情を厚うすべく、来る八月暑中休暇の季節に答礼使節として東京、大阪の代表少女五名を満州国に特派し大連、奉天、新京各都市を訪問、盛んな交歓会を開き新興国の第二世に力強く呼びかけたいと思ひます、代表少女は追つて人選発表いたしますが、日程は大体次の通りです… 主催大阪毎日新聞社 東京日日新聞社

『大毎』『東日』両社は、八月の夏休み中に少女使節の答礼のために東京、大阪から少女五名を選抜して、日満の少女による交流を計画しているというのだ。日程は大阪を起点に、八月三日神戸出帆、大連から奉天を通り、一日新京、一日五京城（現ソウル）となっている。ただしこの時点では答礼少女使節の派遣のみで、（京城を経由する予定だが）朝鮮児童との交流も、「在満将士ノ慰問、戦没将士ノ慰霊」のことも記されていない。この日は大阪で少女使節と協和会女性使節が共に参加して「満州国即時承認国民大会」が開かれ、報道合戦がピークを迎えていた。おそらく『大朝』『東京朝日新聞』（以下…『東朝』）側を出し抜くために、内容を詳細に検討することもなく、思いつきに近い形で計画されたのではないだろうか。

一方これと並行して、全教連も小学生による独自の少女使節への答礼計画を進めていた。

(3) 全国連合小学校教員会の性格

全国連合小学校教員会は、大正一三年（一九二四）一月に結成され、昭和一六年（一九四一）国民学校の発足にともない全国連合国民学校教職員会と改称するが、昭和一九（一九四四）年に大日本教育会に統合されるまで、およそ二〇年にわたり活動した小学校教員会の全国規模の連合組織だ⁽²⁰⁾。その規約には、「道、府、県、郡、市、州及之ニ準スヘキ地域」単位で加盟する（第二条）、「全国各地小学校教員ヲ会員」とする団体（第一条）であることがうたわれ、「現職を去れば直ちに資格を失」うのが鉄則であった⁽²¹⁾。

第一次世界大戦後のデモクラシーの風潮と物価の高騰による教員の生活を守るために多くの教員会が発足したが、県・郡・市単位では十分な成果を上げられないので「更に大同団結を図つて互いに気脈を通じ教員団体の勢力を示さなければ駄目だ」ということがわかった。そこで全国

的組織の必要性が生じ、東京市小学校教員会以下一の団体が発起して設立したのである。⁽²³⁾当初三〇に満たない団体で発足した全教連の加盟団体は、昭和六年（一九三一）には百を越え、学童使節がおくられた昭和七年九月の時点で、一四四団体（含む外地二）にまで増加している。

ただしこれは郡市単位の教員会を合算した数であり、道府県別にみても加盟のない空白県が一七もあり、神奈川県・静岡など一団体のみも八県、同じく二団体も九県もあるなど、必ずしも全国の小学校教員を網羅しているわけではなかった。なかでも山陰・四国・九州への影響力は弱いが、加盟団体の少ない府県でも、その地域の主要都市（山形市・横浜市・大阪市・岡山市・徳島市・高知市・長崎市・鹿児島市など）は加盟しているなど、都市部の勢力は総体的に強いという特徴がある。従ってこの時期の全教連は、東京・京都・広島・石川・愛知と東北（宮城・岩手）と関東圏（群馬・埼玉）の限られた地域を主な加盟団体として、⁽²⁴⁾一部の地方の都市を含み活動する小学校の現職教員による民間団体であったといえるだろう。そしてその活動の中心は発足後に事務所がおかれ、会長を出し続ける東京市小学教員会であった。**【表一】**

教育史の上では、全教連の加盟団体やその構成員である教員たちは、ファシズム教育の推進に積極的に関わっていた、と評価されている。⁽²⁵⁾教員会といえは教員組合のような響きがあるが、その「仕事は右翼張りで」、教員の地位向上を要求するが、設立宣言には国民精神の作興や詔勅（天皇が発する公式文書）の御主旨の貫徹、心身の修養など、時の政府が「思想的には何ら懸念すべきもの」はなかった。⁽²⁶⁾

昭和六年（一九三一）には全教連の活動が文部省（現・文部科学省）の目にとまり百円の補助金が交付される。同会の関係者は金銭ではなく、「これまで多少危険がられて居たのが、文部当局の眼鏡によつて保険をつけられた」ことを大喜びしたという。⁽²⁷⁾そしてそれと符合するかのよう

これに対して全教連は、昭和七年の第九回総会で鳩山一郎文部大臣に感謝状を贈り、翌年には鳩山を総裁に迎えるなど、文部省との蜜月がはじまるようだ。

従って、小学校教員の待遇改善を要求する一方で、後述するように国家主義的教育を急進的に進言する現職の小学校の教員集団（全教連）を、当初文部省当局は警戒していたが、満州事変以降は、同会の利用価値を認めた、⁽²⁹⁾といつていいだろう。そしてその背景には、この時期文部省が教員の思想対策にのりだしたという事情も手伝ったのかもしれない。すなわち、昭和四年（一九二九）、プロレタリア教育の研究と運動をすすめるために新興教育研究所がつけられ、日本教育労働者組合が結成されたことに危機感を抱いた同省は、昭和六年小学校教員思想問題対策協議会を開催しているのである。

全教連が国家主義的教育を推進し、自らの教育実践をアピールすることは、同時に教員の地位の向上や待遇改善につながるという構図があった。創立当初の同会は文部省の単なる御用団体と評価するだけではおさまらない性格も含んでいた。⁽³⁰⁾それは昭和七年の時点でもいえることであり、全教連は文部省の支援を受けているが、その意向を汲んで追従するだけの組織ではなく、むしろその主体的な下からの教育実践は文部省に刺激を与えて、その気にさせる活力に満ちていた。それが全教連の提唱する日満教育提携であり、その一環として日本学童使節があった。

（4）学童使節派遣まで——全教連の日満親善運動——

学童使節の結成に至る経緯については、全教連代表として同使節の監督・引率をした東京市浅草区富士尋常小学校長上沼久之丞（うえぬまきゅうのじょう）⁽³¹⁾が編纂、発行者を兼ねた『日本学童使節満州国訪問記』が詳しい。

上沼は長野県出身で、代用教員をつとめた後一九〇三年（明治三六）

表1 全国連合小学校教員会加盟団体(昭和7年9月1日現在) 146団体(含外地2)

加盟数		
3	北海道	旭川市・室蘭市・小学校長会
1	青森	三戸郡
9	岩手	盛岡市・稗貫郡・岩手郡・東磐井郡・上閉伊郡・西磐井郡・和賀郡・江刺郡・紫波郡
16	宮城	仙台市(T13 [18])・名取郡・桃生郡・栗原郡・牡鹿郡・宮城郡・志田郡・本吉郡・加美郡・伊貝郡・黒川郡・登米郡・遠田郡・玉造郡・亶理郡・菊田郡
*	秋田	
2	山形	山形市・米沢市
2	福島	小学校長協議会・相馬郡
*	茨城	
*	栃木	
15	群馬	利根郡・郡市連合小学校長会・前橋市・群馬郡・吾妻郡・高崎市・多野郡・勢多郡・邑楽郡・碓氷郡・北甘楽郡・山田郡・新田郡・佐波郡・桐生市
11	埼玉	埼玉県(S2 [40])・埼玉県支会川越市・北足立郡・入間郡・比企郡・秩父郡・児玉郡・大里郡・北埼玉郡・南埼玉郡・北葛飾郡
* (1)	千葉	×東葛飾郡
5 (10)	東京	東京市(T13 [1])・西多摩郡・八王子・北多摩郡・×北豊島郡・南多摩郡・×南葛飾郡・×荏原郡・×豊多摩郡・×南足立郡
1	神奈川	横浜市(S6 [101])
2	新潟	新潟市・中魚沼郡
5	富山	高岡市・東礪波郡・富山市・中新川郡・西礪波郡
9	石川	金沢市(T14 [32])・珠洲郡並実業補習学校教員互助会・江沼郡・能美郡・石川郡・河北郡・羽咋郡・鹿島郡・鳳至郡
5	福井	福井市・遠敷郡・南條郡・坂井郡・丹生郡
4	山梨	甲府市・東山梨郡・北都留郡・西山梨郡
*	長野	
*	岐阜	
1	静岡	浜松市
8	愛知	中島郡・豊橋市・名古屋(T13 [21])・岡崎市・愛知県連合・一宮・渥美郡・額田郡
1	三重	北牟婁路郡
*	滋賀	
8 (10)	京都	×葛野郡・京都市(T13 [7])・何鹿郡・愛宕郡・×相楽郡・加佐郡・南桑田郡・京都府連合・與謝郡・綴喜郡
2	大阪	泉北郡・大阪市(S6 [100])
2	兵庫	出石郡・朝来郡
2	奈良	生駒郡・県連合
*	和歌山	
*	鳥取	
*	島根	
1	岡山	岡山市
20	広島	呉市・尾道市・広島市(T13 [13])・安佐郡・福山市・豊田郡・加茂郡・御調郡・甲奴郡・沼隈郡・山縣郡・高田郡・世羅郡・雙三郡・神石郡・佐伯郡・安芸郡・深安郡・蘆品郡・比婆郡
2	山口	下関市・郡市連合
2	徳島	三好郡小学校長会・徳島市
*	香川	
*	愛媛	
1	高知	高知市初等教育研究会(S4 [82])
*	福岡	
*	佐賀	
2	長崎	長崎市・下縣郡津島小学校
*	熊本	
1	大分	郡市連合
*	宮崎	
1	鹿児島	鹿児島市(T13 [25])
*	沖縄	
1	朝鮮	釜山
1	樺太	樺太小学校長会

(「加盟団体名簿[昭和9年6月1日現在]」『全国小学校教員精神作興大会御親閲記念誌』[全国小学校教員会、1934年]より作成)
*加盟団体のない県17(秋田・茨城・栃木・千葉・長野・岐阜・滋賀・和歌山・鳥取・島根・香川・愛媛・福岡・佐賀・熊本・宮崎・沖縄)
×は加入していたが脱退、或いは市町村合併等で解散したもの
ゴシックは代表児童を送り出した団体、なお(T13[1])は加入年と加盟順位をあらわす。

東京府青山師範学校卒業、附属小学校訓導を経て一九〇八年（明治四一）東京市浅草区福井尋常小学校校長、一九二二年（大正一一）から一九四三年（昭和一八）まで東京市浅草区富士尋常小学校校長を務めた人物で、当時は全教連の幹事、昭和九年には会長、東京市小学校教員会では幹事長をつとめている。

同書は二六五頁にわたる手書きの謄写版印刷の私家版で、一部の関係者だけに配られたらしく、所蔵機関も少ない。一般にほとんど知られていない資料だ。その奥付には「昭和八年九月一五日印刷（満州国承認一周年）、昭和八年九月一八日発行（満州事変二周年）」、発行所は富士尋常小学校内龍鳳社となっている。⁽³²⁾この記録をみるかぎり、本部の東京市役員として学童使節の計画から実行まで、上沼が団長となりすすめたことがわかる。

同書の緒言には、上沼自ら二〇頁にわたり「日満親善の使命を負ひ学童一五名、監督三名、付添二名が満州国を訪問した」経緯を説明している。彼は「この小さい子供が、大きい使命を無事果たした事は……生涯を通じて大いなる感銘のポイントである。……この記録は、使節にとつてなつかしい平和の記念塔である」として、次のように記している。

（訪日少女使節の答礼のため派遣された同使節は）新国家建設を祝ふ福し 到る処で日満児童と交歓して 往復の途路関東州の児童と交歓し 朝鮮の児童と融和し 一面には在満将士並に警察官の慰問と 戦没将士の慰霊を行ひ 日本精神の發揮と 国民的自覚を高め得た事は 有史以来始めてのことである。確に学童の脳裡に 国際親善の萌芽を植えつけた事は、偉大なる効果であつた。⁽³³⁾

全教連の「日本児童使節派遣要項」には、少女使節への答礼だけでなく「帰路朝鮮児童とも交歓して内鮮融和の振興を図る」こともうたわれ

ているので、『大毎』『東日』の派遣計画より、さらにその目的を拡大している。前述したように満州事変後、とりわけ満州国が建国される昭和七年頃から、全教連と文部省との結びつきがより強くなるが、そこにいたる前段階が全教連の日満親善運動であつた。

昭和五年（一九三〇）全教連の総会で、日華教育連携に配慮することになり、翌年の総会で実行方案を作成し、「小国民の親善によつて平和の将来を解決」することにした。そのような時に満州事変がおこつたので、教育問題の実行委員が本部に集まり協議して、「外務・陸軍・海軍・参謀本部・首相・文部を歴訪して、排日教材の改訂や親華教材の掲載を建議し」た。そして「国際連盟へは排日貨侮日の教材根絶」を確認したという電報を打ち、「駐日中華民国公使館を訪問して、日華親善教育を提唱」。さらに昭和七年三月満州国の建国が宣言されるが、その混乱は「国民教育上黙視するに忍び難い」ので、同年五月の第九回総会で、日満教育連携案を討議し、「学童の交歓 教育者の親善 視察団の派遣 通信交換 日満教育大会の開催」などの実行案が議論された。このような矢先に、満州国から少女使節が派遣されたのである。⁽³⁴⁾

（5）全教連の答礼計画——私設団体による日満親善——

東京市小学校教員会では、少女使節が訪問した都市として答礼使節を派遣すべきだ、と東京市に申し入れた。しかしまだ満州国は承認前の国家であるため、国際的に支障を生じる恐れがあり、しかも「匪賊や便衣隊の出没常ならず危険」なので問題が多い、というのが東京市側の返事であつた。一方陸軍参謀本部は、満鉄沿線なら日中は危険がないと保証したので、外務省に相談すると、趣旨はよいが満州国は正式承認前で公式なものとはならない（ので支援しにくい？）という。つまり「個人としては賛成者もあつたが、公のものとしては賛成者がなかつた。実行不可能ならんとの消極的態度がおおかつた」のである。

そこで全教連が主体となり答礼計画をすすめることを、東京本部の役員で話し合った。そうすると確かに公的機関が心配する不都合を取り除くことができるし、教育上のメリットもみえてくる。それは次の点だ。

(1) 全教連は私設団体だから、国際外交に支障をおこすこともない。しかも(2)これは「教育親善の子供使節」である。さらに(3)全国的に学童を選抜して派遣すれば、日本対満州となるので、(4)少女使節の答礼ばかりか「建国祝賀」「在満将士の慰問」「戦没将士の慰霊」も行うこともできる。だとすると(5)教育上「少国民たる学童として意義深い」催しになる。

以上のことを「外務省松島局長」を訪ね、説明し協力を求めたところ、坪上貞二文化事業部長を紹介された。坪上は答礼計画の意義を理解したばかりか、実行にあたり適切なアドバイスもくれた。これが学童使節派遣の動向を決定したのである。しかも「この計画は六月末で少女使節の在京中のことだ」と、上沼はいう⁽³⁵⁾。

ここには満州国の既成事実化を推進するために、現場の教員団体が政府や軍隊、特に文部省が将来取り組むべき課題を先取りして、それを目に見える形で担い、国家や社会にアピールする姿を見ることができ。齋藤実内閣が、軍部や国内世論の強い突き上げをうけて、日満議定書を結び、日本が満州国を正式承認する二か月前のことである。

② 日本学童使節の成立―結成から選抜・親善計画まで

(1) 答礼計画の合同―全教連の主導のもとに

東京市小学校教員会の役員は、学童使節の計画をすすめるために、秋に大連から新京、奉天、安東、朝鮮の旅程で三週間、九州から北海道にわたり代表を選出、旅費はそれぞれの地方団体が負担し、半額を本部が

補助する、という下案をつくる。そしてこれを七月六日、金沢市で開かれた第九回総会で諮り、承認された。ところがその直前、彼らは新聞で『東日』の「答礼少女使節」計画を知ることになる。

全教連側の資料によれば、「期日を異にして同一目的のもとに学童を満州国へ派遣する」計画が行われたことは、「日満親善の国民的動向の表現」であり、「満州国正式承認の気運を促進するもの」だ、と記している。ただし両者の計画を検討すると、『大毎』『東日』案は夏休み中で学業に支障はないが、暑すぎて小学生の旅行には不向きだ。ところが全教連の計画は、季節がよいのと全国的であり、少女だけではなく男子も含まれている。そこで全教連側が『東日』事業課に派遣計画の合同を申し込んだところ、『東日』は『大毎』とも協議し「一度発表したのであるから、変更には苦衷があるが、学童のことであるから譲歩して挙国的に合同することになった。その結果、全教連は使節の選定・旅費・監督(引率)を、『大毎』『東日』は土産物・使節の服装・絵葉書の募集・訪問地の自動車費・通信連絡等を分担し、合同主催することにした⁽³⁶⁾。

ただし実質は全教連の派遣計画を『大毎』『東日』側が受け入れ、協力する形になっている。使節の人数は、『大毎』『東日』案の少女五名ではなく、小学男児七名、女児八名の計一五名の三倍、しかも大阪から東京に起点を移し、期間は九月一日～一〇月二三日の間、そして使節の資格は小学生に限り、「身体強健伝染性病患なきもの・学力操行共優良なるもの・比較的発表自由なるもの・可也食事に好悪なきもの」の四点を基準に選抜するなど、全教連側の計画に沿ってすすめられている。新聞社は「満州国児童へ日満親善の希望を述べた」メッセージと贈呈品として伊勢神宮・富士山など国情を紹介する絵葉書の手配を担当し、児童使節訪問記念品も用意するなど背後から支援する形をとる⁽³⁷⁾。

むしろ『大毎』『東日』側は、使節の人選や引率など手間や責任を負うこともなく、魅力的なニュース・ソースを独占することに成功したと

いえるだろう。新聞社側にとって、全教連との提携は「苦衷」ではなく、まさに渡りに船であった。

(2) 学童使節の選抜と結成

男女各一名（東京・大阪）と女兒（京都・広島・関東・名古屋・横浜・神戸）及び男児（金沢・北海道・仙台・九州・四国）それぞれ一名を夏休み中に使節として選抜するよう、全教連は各地方団体に依頼する。しかし少女使節の訪問地でもある京都だけは、加盟団体ながら意見を異にして参加しなかった。また神戸市は八月に入って交渉したために、趣旨には賛同し、参加も希望したが、二期期がはじまる九月にならないと役員会が開催できないので、時間的に間に合わない、という回答であった。それは当時神戸市小学校教員会は全教連に加盟していなかった（昭和八年一〇月一四日加盟）からである。そこで京都と神戸の女兒二名分は東京・横浜で補った。未加盟の神戸市はしかたがないが、京都市の協力を得られなかったのは「甚だ遺憾」だ、と上沼は憤っている。⁽³⁸⁾ここからも全教連が全国の小学校教員に強制力をもった公の団体ではなく、任意の団体であったことがわかる。

使節の決定の方法は、各団体それぞれだが、たいていは各学校が候補者をだし、役員の口答試問、面接、医師の身体検査を参考にして選抜した。⁽³⁹⁾例えば、東京から選ばれた小学校六年生の高野道雄は、「満州へ行きたい志願者があつたら申し出る」といわれたので、父母と相談して「早速先生に申し出ましたところ体格検査で合格したんです」と答えている。⁽⁴⁰⁾前述の四点の選抜基準の中でも、学業成績はもとより、子供にとっては長期間の強行軍なので、「身体強健」であることを十分に配慮して各教員会が厳選した。

さらに横浜代表の小笠原秀子は、市内の雄弁大会で優勝した「意思表示にかけては横浜小学生のチャンピオン」（『神奈川東日』九月八日）と

紹介されている。巧みな弁舌とともに使節の写真をみるかぎり、容姿もある程度考慮されて選抜したと推測される。

『日本学童使節満州国訪問記』に記された使節一五名の小学校名・学年・名前、生年月日、年齢及び父親の職業は【表2】の通りである。⁽⁴¹⁾

監督は上沼の他、麹町尋常小学校校長横川住一、大阪市の船場尋常小学校訓導田村千世子、付添は横浜市関東病院長渡辺房吉、大阪毎日新聞編集顧問西村真琴（一八八三―一九五六）であった。

約一か月にわたる子供たちの旅行のために、医師の同行が望ましかった。そこで日本医師会の理事などを歴任する医学博士の渡辺を選出した。渡辺は娘の幹子が使節に選ばれたので「私個人として行くつもりではありませんが」、新聞社側との話し合いで「それは好都合」と付添に決定した（『神奈川東日』九月八日）と語っている。西村は生物学者で、元北海道帝国大学教授、阿寒湖のマリモの研究で知られるが、広島の高等師範学校を卒業し、以前満州の遼陽の小学校校長として数年勤めた経験があった。横川は全教連の本部理事で、使節派遣案の責任者で、会を代表して新聞社や官公庁の打合せなどを行った。

使節には八名の女子がいることに加えて、東京以外からも監督者を選抜するべきだとの意見もあり、「大阪市では女教員の最高待遇を受けて居る名訓導」である田村を選出した。大阪全教連の会長の大浦倉之助校長は「僕も腹を切らなくて済んだ」と述懐した⁽⁴²⁾という。

近畿地方の拠点である京都市の協力が得られないばかりか、しかも神戸市は未加盟で、大阪府の加盟団体は大阪市と泉北郡の二つのみである。大浦の言葉には、『大毎』のお藤元の関西からの選出に苦勞した様子を伺うことができる。また全教連の組織率の低い四国、九州地方も県で唯一の加盟団体のある高知・鹿児島市からの選抜であった。これらのことを総合的に考えると、厳密な意味では学童使節は全国の小学生から選ばれた代表というには、少し偏りがありすぎたのである。

表2 学童使節名簿

学校名	氏名(ゴシックは女兒)	生年月日(年齢)	父親の職業
札幌市西創成尋常小学校六年	山口豊	T9. 4. 18 (13)	清涼飲料水製造業
東京市本所区江東尋常小学校六年	高野道雄	T9. 9. 21 (13)	弁護士
仙台市榴岡尋常小学校六年	松岡達	T9. 4. 21 (13)	第七十七銀行調査部
大阪市東淀川区啓発第一尋常小学校六年	三好忠幸	T9. 9. 4 (13)	商業
金沢市松ヶ枝町尋常小学校六年	荒川宏	T9. 10. 29 (13)	洋服仕立職
高知市第四尋常小学校六年	原田力	T9. 6. 8 (13)	高知高等学校教授
鹿児島市鹿児島尋常高等小学校六年	山口文二	T9. 9. 14 (13)	商業
東京市麹町区番町尋常小学校六年	師岡康子	T9. 10. 28 (13)	早稲田大学教授
大阪市東区船場尋常小学校五年	西尾幸代	T10. 11. 2 (12)	足袋卸売業
横浜市青木尋常高等小学校六年	小笠原秀子	T8. 5. 27 (13)	芝浦製作所会社員
埼玉県大宮尋常高等小学校高等第二学年	関根浪子	T7. 9. 17 (15)	埼玉県戸田村役場書記(前栃木警察署長)
名古屋市露橋尋常高等小学校六年	小栗房子	T9. 3. 25 (13)	玩具製造業
広島市袋町尋常高等小学校六年	小島君子	T9. 4. 27 (13)	日支親善中央協会総裁
東京市日本橋区千代田尋常小学校五年	藤ノ木清子	T10. 9. 4 (12)	自動車商会
横浜市老松尋常小学校六年	渡辺幹子	T9. 4. 13 (13)	医師

(3) 学童使節への注意事項

使節一五名中六年生が一二名、五年生二名、高等科二年一名、一二歳から一五歳までの小学生で、大半は来春の中学・高等女学校の入学試験を目前に控えていた。そこで学業等を含めた注意書「学童使節に対する希望事項」を送る、という教員会らしい配慮をしている⁽⁴³⁾。その内容は、学業については次の四点であった。

- 1 (約四週間の出張なので) この間の教材を夏期休業中に適当なる方法により予め学習し修業上遺憾なき様にする事
- 2 朝鮮満州の地理歴史に関する教材を復習し若くは新に学習し訪問地の事情につき明確なる知識を習得する事
- 3 満州新国家建設の精神 政治組織 公省署 要路人物等につきその大要を調べ置く事
- 4 次の歌曲に親しみ成るべく歌へる様にする事 満州国建国頌歌 大満州国歌(歌詞曲は印刷物を贈呈す)

特に1の欠席期間中の授業内容を学習しておくことは、受験を控えた小学生には切実な問題であった。例えば、東京代表の師岡康子は、取材のために記者が訪問すると不在で、かわりに母親が「満州へ行くとそれだけ学校の方が遅れるから、今のうちに勉強して置くのだといつてこのごろは毎晩六時頃から二時間ばかり一生懸命です」(『東日』九月八日朝8)と答えている。

満州国をはじめとする訪問地の地理や歴史、政治などの予習の他に、全教連はより具体的な指示もしている。それは宮城遥拝、神社参拝、忠霊塔礼拝の予定とともに内地の送別会や満州や朝鮮各地の歓迎会を想定して、「男女各見交代」で「子供らしき簡単な挨拶」を考えておくこ

とであった。さらに次のような諸官庁の役職者への挨拶の用意まで指示している⁽⁴⁴⁾。

- イ 総理大臣 文部大臣 拓務大臣 外務大臣 陸軍大臣 鉄道大臣
市長等に出発の際の挨拶及帰国後の報告挨拶
- ロ 関東州長官 小川大連市長 旅順市長 林満鉄総裁 八田満鉄副
総裁 満鉄学務課長等訪問
- ハ 本庄軍司令官 橋本参謀長 領事 満州守備各地部隊長等訪問
- ニ 満州国執政 鄭國務総理 駒井長官 金新京市長 焰奉天市長
内政部長 外交部長 交通部長 資政局長 安東市長等訪問
- ホ 平壤市長 京城市長 朝鮮総督等訪問

使節を代表して一五名の男女がそれぞれ交代で挨拶をするなど、現場の教員集団らしい演出であった。おそらく選抜された各学校単位で、これらの挨拶を周到に準備したのだろう。挨拶の予定者は、日満両政府及び関東州、朝鮮、満鉄の主な人物が網羅されている。これ以外にも、本庄繁・武藤信義の歴代関東軍司令官を訪問するなど、もはや学童使節は公に近い親善使節の役割を担いはじめていたのである。

(4) 親善交流の方法―建国人形と絵葉書―

文部・拓務大臣のメッセージをはじめ、訪問官庁の交渉などは『大毎』『東日』側と連携した結果であり、「全く共同主催の実を挙げ」たという。使節携帯目録には、「文部大臣メッセージ（満州国）、拓務大臣メッセージ（関東州 朝鮮）」とともに、「執政夫妻への記念品 鄭國務総理への記念品 武藤特命全権への記念品」がある。これらはいずれも日本人形であった。執政夫妻には龍鳳人形・鄭と武藤には春駒人形で、龍の風をもったものや春駒にまたがったものなど、「新春を寿ぐ子供の遊び、日本

精神の表れたもので、建国を祝する意味をつけて建国人形と命名した」。その他に学童使節は、「満州国 関東州 朝鮮児童への絵葉書数万枚」を携えていた。絵葉書は「日本の国情風俗を知らせ 可愛い子供達の通信文を書いたもの」であり、それを持参することにより「子供の手から子供の手へ 純真なる童心の交歓」をすることができるとある。これは「日満親善の礎」となる意義深きものだ、という認識が全教連にはあった⁽⁴⁵⁾。そこで広島市の九千枚をはじめ、選抜された学童の出身地の市長に依頼状を送るとともに、同教員会の会長にも、それぞれ枚数（札幌市九千・大阪市一万八千・仙台市六千・金沢六千・高知市三千・鹿児島市三千・横浜市一万二千・大宮町千五百・名古屋市一万五千・東京市三万）を寄贈するよう協力を呼びかけている。

- 一 貴市を 紹介する絵葉書（通信文記入のこと）
- 二 宛名は次の三種 満州国のお友達へ。関東州のお友達へ。朝鮮のお友達へ。
- 三 差出人は学校名 学年 氏名 年齢を記入のこと

であった。希望枚数は満州五千・関東州二千・朝鮮二千、日付は九月六日で、九月一五日までに大阪毎日新聞社事業課宛に送るよう依頼している⁽⁴⁶⁾。

絵葉書は小学校の授業中に学校単位で児童に書かせたらしく、『東京日日宮城版』（九月一三日…以下『東日宮城』）は「仙台市教員会では…六千枚の通信文をしたためた郷土の絵葉書を贈ることを決議し市内十八小学校では目下それぞれ上級児童をして通信文を書かしてゐる」と報じ、机の上に積まれた絵葉書を教師三名が整理している写真を掲載して

いる。

また『大毎』昭和七年九月九日朝刊七面上半分は、学童使節の特集だ。建国人形や使節全員を顔写真付で紹介するほか、「日本の少年少女から満州国のお友達へ」「親愛の絵葉書を募ります 日本学童使節に託して」という見出しとともに、家庭にある日本の地理、歴史、風景、風俗等に関係のある絵葉書に、日満親善を語る文面を書き「満州国のお友達へ」という宛名で、学校名 学年 氏名 年齢を記入の上、これも九月十五日までに送るように呼びかけている。ただしこれは『大毎』だけで『東日』にはみられない。

全教連が代表児童の出身地や教員会に依頼した希望枚数を単純計算すると、一〇万八千枚になる。横浜は一万六千枚（『神奈川東日』九月一日）、鹿児島は約四千枚（『大阪毎日鹿児島・沖縄版』九月一日）、以下『大毎鹿児島』という報道にあるように、割り当てられた枚数以上に集まったようで、新聞社の呼びかけに応じた分も合わせて、わずか九日間で約一五万枚に上った。その内、関東州へ三万枚、朝鮮へ三万五千枚、満州へ八万五千枚贈った。交歓会が開かれた会場ではその場で、そうでない場合は、その都市の学校へ分配を依頼し、大連から新京までの沿線では、停車駅で各学校へ五六百枚から一千枚を袋へ入れて贈呈した。在満中に早くも返信が届くものもあり、帰京後半半年位は通信が続いた⁽⁴⁷⁾という。

ただし『東日宮城』（一〇月二〇日、二一日）は「満州からの便り」として新京の女学生からの絵葉書への返信を紹介しているが、これは在満邦人からのものだ。学校で短期間に書かされた葉書の内容を翻訳する余裕もなく、おそらく返信の多くは日本人の子供たちであった、と推測される。それはとにかく、子供達がメッセージを託した絵葉書が、直接満州・朝鮮の子供達の手に届いたのは事実である。その意味では、内実はさておき、形の上では学童使節によって満州国をはじめとするその周

辺の外地（関東州・朝鮮）の子供達による親善交流が実行された、といえるだろう。

③ 日本学童使節の誕生

（1）学童の欠席処理

ただし国や文部省が主催する公の行事ではない以上、使節の派遣期間中の出欠席の処理が問題になってくる。まだ満州国を正式承認していない状況下で、民間の教員団体が小学生を授業期間中に派遣する場合、（当たり前前の話だが）欠席の処理に法令上の規定があるはずがない。

文部省普通学務局は、事故欠席にならないように地方官庁と協議しろというが、特別扱いは困難だ、まして小学生が一カ月も学校を休むことは感心しない、という声もあった。上沼は「意外の支障に逢着した」というが、正規の授業を休ませて、未承認の国へ（出発の三日前に承認されたとはいえ、それは後の話だ。）建国祝いと親善のために小学生を派遣することは、当然公欠に値するという全教連や上沼の考えは、今日ではなかなか理解できないだろう。

「新しい事項が起こつた際は法令の精神を活用して時代にふさはしい取扱ひが創造されねばならぬ。官僚的に画一処理は生きた人間教育には考ふべき事である。」と上沼は憤っている⁽⁴⁸⁾。確かに正論だが、受験を控えた者が多い小学生に、授業よりも日満親善を優先させるところに、確かに昭和七年という時代が映しだされている。

（2）日本を代表する学童使節

市や町をあげての祝福

もっともこの問題は、時と共に希望通りに解決したという。それは学

童使節が満州国への友好や建国を祝福するための使命を担った使節として、政府や軍ばかりか県及び市町村単位にいたるまで国民的に認められはじめたからだろう。特に地方の盛り上がりは過熱気味で、郷土の誉れ、母校の名誉として連日の報道を繰り返している。

筆者が確認できた『大毎』『東日』の地方版は五紙で郷土代表の学童使節の報道の回数は、それぞれ一面かぎりの紙面に、『東京日日北海道・樺太』（以下、『東日北海道』）八回、『東日宮城』一七回、『東京日日埼玉版』（以下、『東日埼玉』）五回、『神奈川東日』九回、『大毎鹿児島』二二回と、満州に多くの将兵を派遣していた第二師団のある宮城と九州から唯一の代表をだした鹿児島は過熱気味の報道を連日繰り返している。

それでも比較的冷静な関東圏の横浜・大宮の例を紹介しよう。横浜市代表少女二名は、それぞれ全校生徒よる歓送会とともに校長の付添で市長と助役に出発の挨拶に市役所を訪ね、日満両国旗を掲げて万歳万歳を叫ぶなか盛大な見送りをうけている。そして東京を出発した日の夜、特別に横浜で市長も参加した歓迎会を催している。

使節の中最年長の関東代表埼玉県大宮町（現さいたま市）関根浪子（一五歳）は、九月一五日前一時半、大宮町長と学校長、同級生二〇余名に伴われ大宮氷川神社に参拝し、出発の奉告（神仏にことを知らせること）の式を終える。『東日埼玉』は、この時刻は「日満議定書の調印式の瞬間に当つてゐたことも意義深いものであつた」と伝えている。そして関根は日本と満州国が仲良くして行かなければならない大切な時期だと始終先生から聞いているので、「郷土と日本の名を辱しめぬ様使命を果たして来る決心です」と決意を述べている（『東日埼玉』九月一六日）。

さらに帰国後大宮駅に着いた様子を、「童心使節浪子さん帰る 大宮駅頭の感激」と報じている。一〇月一五日前九時四五分列車がホームに入ると、雨の中にもかかわらず町内の四つの小学校の高等科の生徒や

町民が出迎え、新聞社の歓迎旗が渦まき、万歳万歳のどよめきのなか、怒涛の如きおめでとの乱射で、拍手の波のなか町長の発声で万歳を三唱、その後降りしきる雨のなかを氷川神社まで凱旋行進する。そして午後三時から大宮小学校講堂での歓迎会に臨んだ（『東日埼玉』一〇月一六日）。

使節の帰還は、地域の名誉であつた。それを小学校の関係者ばかりではなく、町長をはじめ町民をあげて祝福しているのである。北海道代表の山口豊も五百名の児童をはじめ市民に見送られ、帰郷の出迎えは千人余で、道庁の長官を訪問するなど、横浜・宮城・大宮とともに地方では学校という枠をはるかにこえて、首長をはじめ地域全体で使節を送りだしている。そして東北・九州はそれに輪をかけた盛大さであつた。

日本帝国の代表としての責務―宮城

『東日宮城』（九月九日）は、幼き胸に母校の名譽を刻みつけられた松岡少年が出発前に担任から満州国への充分な知識を身につけるために地理・経済・政治・歴史や満州国の国歌の特別指導をうける様子を伝えるとともに「重責を担つた東洋平和のいと若き使節」である「松岡少年・晴れの日迄のプロ」（グラム）を詳細に掲載している。

- 一二日 歩兵第四連隊・第二師団留守司令部
- 一三日 榴岡小学校三百余歓送会
- 一四日 正式な挨拶廻り（校長・東日仙台支局長とともに）天神神社・青葉神社・県知事・市長
- 一六日 駅前広場にて歓送式

一六日の出発日は、特に盛大であつた。全校生徒が集まり榴岡小学校の校旗と松岡達使節を先頭に児童五百名が列を組み仙台駅まで行進す

る。駅には市内一七小学校の代表児童五千名が各校の校旗を立てて見送り、駅前広場で歓送式をおこなう。そこには知事・市長をはじめ有力者が参集するという大掛かりなものであった。『東日宮城』(九月一六日)は、満州事変一周年の催しの一つとして位置づけているらしく、「訪満学童使節(松岡達君) 歓送会：市関係者と共に当日正午から駅前広場において全市小学校代表及び各種団体一万人を以て同使節歓送会を開きます。県民各位の御参加を熱望す」という案内までを掲載している。

さらに宮城電鉄には学童使節に託して第二師団の将士にも絵葉書を贈りたいという希望が寄せられ、東日仙台支局と榴岡小学校が相談した結果、五百枚だけ応じることになり、さらに市内の各小学校の児童が通信文を書いたという。絵葉書は松島を中心に宮城電鉄沿線の風景で「これに可憐な子供達の通信文が記され贈られる諸将兵にとつてどんなに嬉しい贈り物となるかも知れない」と自賛している。この絵葉書は学童使節の訪問に合わせて新京まで師団長が副官が受け取りに行く予定であった(『東日宮城』九月一四日)。

一三日の学校内で開かれた歓送会で松岡使節は、次のように挨拶している。

私は学校のため、わが日本帝国のため満州の友人達と仲善しになるために行つてきます。東北代表としての責務と荣誉を傷つけないように使節としての役目を十分果たしたいと思ひます。

さらに市長から武藤信義関東軍司令官・第二師団長などへのメッセージをたくされ、知事から「これから日本を背負つて行くのは君達少年」だと激励されると、「よくわかりました私の身体は私だけのものではありませんせぬ皇国のものであります」と答え周囲のものを感動させた(『東日宮城』九月一五日)。

そして松岡少年の父親は、息子が満州国から帰国するに際しての新聞記者に、その心境を語っている。

：達になんといつて感謝したら好いか―何をして達の功績を誉めたら好いかあまりの素晴らしい子供の名誉の前に好い方法も見当りません、全く私達一家未曾有の名誉であり永遠に特筆すべき
歓喜です(『東日宮城』一〇月一四日)

仙台帰郷後も歓迎会と同様の盛り上がりで、プラットホームには、何時からともなく満州国国歌の合唱と榴岡小学校の校歌が流れる。列車が到着すると、万歳三唱のなか駅前広場で歓迎式の後、徒歩で榴岡小学校に凱旋し、留守司令部・知事・市長を訪ね、翌日は仙台放送局で歓迎放送が行われ、同小学校では執政溥儀などから貰つてきた「お土産展覧会」が開かれた。

『東日宮城』(一〇月一二日)は、帰郷を前にして「松岡少年は正に童話の国の凱旋將軍の意気を見せて凛々しい姿を仙台駅に現すであらう―もつともだ、松岡少年の訪満は国際的であり歴史的なのだ。従つて駅頭における最初の歓迎式は最も熱誠をこめたものでなければならぬ」と記していたが、確かに熱誠をこめた歓迎式であったことが報道からも推測される。

鹿児島市・鹿児島県の名誉

鹿児島代表山口文二も学校内の歓送会とは別に、千名による照国神社で使命貫徹祈願祭を執行の後、「栄ある学童使節」の歓送会には、来賓として知事・市長代理の訓示があり、その後県庁・市役所へ挨拶をする。そして一四日の出発は、鹿児島市をあげて「この輝かしい門出を異常な感激興奮をもつて歓送」するのだ。

その日は知事代理以下学事・軍関係者、一般市民以下四千人が見送る。駅の内外は人と旗の波に充たされ、発車のベルがなると文二少年は車窓から上半身を乗り出し「キツと使命を果たして帰ります」と挨拶をする。そして急行の各停車駅（伊集院・川内・出水）ごとに盛大な見送りをうけたという。

帰郷後は鹿児島市の百貨店山形屋の五階大ホールの「日本学童使節満州国山口文二君報告会」には千人が詰めかけ、同店三階の元食堂では「満州国お土産展覧会」が二日間開かれていた（『大毎鹿児島』一〇月二二日）。使節に選出されたことを伝える記事の見出し「感激を胸に／待焦がれる出発／地図を広げ不安の親を説く／名譽の山口君一家」（『大毎鹿児島』九月一〇日）の後に、山口少年の両親は「たつた一人の九州代表としてふつつかな子供を選んで戴いたことは全く光榮と感謝の他はありません」と感激し、校長は「九州代表として本校から山口文二少年が選ばれましたことは、ひとり学校として有難いばかりではなく鹿児島市としてまた県としても光榮であり、名譽である」と喜びを語る。そして学友は九州には鹿児島よりすんだ県や都市があるが「それらをさしおいて南のはての我が鹿児島市から君が選ばれたことは何という痛快なことぞう」（『大毎鹿児島』九月一四日）と作文に書く。

このように使節に選ばれることは、家・学校・市・県の名譽として、日本を代表する公の使節のように性格が変化していった。もはや私設団体である全教連や民間の新聞社の企画事業という枠をこえて、学童使節は一人歩きをはじめたのである。

(3) 日満を結ぶ大使

大阪市長関一（一八七三〜一九三五）は、『大毎』に「平和の楽土としての 新興満州国に使用する学童使節」という一文を寄稿している。そのなかで日本は「新興満州国育ての親として」物心両面の援助が必要だ

が、両国をつなぐものは「信」と「愛」であり、「この意味で今回の学童使節の持つ責任は、子供とはいへ実に重大」だと子供使節ならではの外交上の効果を記している。

さらに縣忍（あがたしのぶ・二八八一〜一九四二）大阪府知事は、「日満を結ぶ 大使としての我学童使節」として、少女使節と学童使節を天使とまで形容して、次のように語っている。（なお下線部は引用者…以下同じ）

さきに満州国から来朝した…平和の使ひ（少女使節）が全国の小学校児童によびかけ、また婦人使節（協和会女性使節）を通じて、「どうか満州国を承認して下さい兩國はしっかりと結びつかねばなりません」と、高らかに日本国の承認を要望する旨を叫んだものだ、わが国民はこれによつて随分注意を喚起した、小国民達も満州の日本のハッキリと持つやうになつた、ところがこんどは承認後の日本の学童使節を迎へることだから、三千四百万のよろこびにみちた民衆はキツト心から歓迎してくれるだろう…純真なる十五名の使節が子供の手で平和を誓ふのだ、どうして快哉を叫ばずにゐられようか！⁽⁴⁹⁾

さらに縣は続けて「無邪気な子供達が握手する光景を想像する時、なんとほなしに感激に動かされ両眼に涙のにじみ出るやうな気がするではないか、満州国の要人が食事会を催すなど「いかに満州国の巨頭たちがこの純真無垢な児童の渡満をよろこんでゐるか吾人の想像に余るものがある。」⁽⁵⁰⁾という。

「平和の使ひ」「純真なる十五名の使節」「子供の手で平和を誓ふ」の語が踊る縣の文章にあらわれているように、謀略がうすまぐ大人社会の醜さを覆い隠す子供というイメージの利用価値が、日満の両政府をはじめ社会的にも浸透していることがわかる。

このように子供による日満の親善交流が、私設団体である全教連の主導のもとに形を整えられ、それをマスコミが合同主催し、政府が全面的に協力することで日本学童使節が誕生したのである。

④ 東洋平和と国際化、日満教育の提携

(1) 学童使節と満州事変一周年

学童使節の演出効果を最も高めることができるのが九月一八日であった。上沼は言う。新国家満州は、執政宣言にあるとおり「王道楽土 門戸開放 民族平等」の理想国家である。

これに対し支那は勿論 欧米諸国は疑ひの目を以て見てゐる。日満の特殊事情は (リットン) 調査団でさえ認識不足である。満州国よりは頻りに 承認を希望して居り 国民的世論は承諾速行に傾いてゐるが 手続き上承諾が困難であつた。(だが出発直前に日満議定書の交換により満州国が承認された。) 満州国の喜びは勿論内地の承認祝賀の行列は 際立つて深い印象を与へ：満州の野に花が咲いた感があつた。又出発先日の十八日は 柳條溝(湖) 爆破の一周年記念日であつた。この記念日に本庄將軍を訪問した。誠に幸先がよい。丁度出発直前に承認とは 不思議な程 好い時期に当つたものである。⁽²⁸⁾ …

上沼をはじめとする全教連が、学童使節の派遣時期を、当初新聞社側の計画した夏休み中ではなく、九月中旬にこだわった最大の理由は、九月一八日の満州事変一周年を意識していたからであろう。これに満州国承認というおまけまでついたので。

九月八日には本庄繁ほか五人が凱旋將軍として帰京し、一五日に満州国が承認されると日本中が熱狂に包まれる。例えば「両国旗を打振り 四万人行進 靖国神社から宮城へ」などの見出しにあるように、在郷軍人東京府市連合会が盛大な祝賀の大会を開くことを『東日』(九月一日朝刊)は告げている。

さらにその前日の一四日付『東日』朝刊七面は、深川明治第二小学校五年女生徒五人が「これを元手に海軍省に訪れたことを報じている。陸軍の愛国機がすでに六〇台をこえているのに海軍の報国機は五、六台にすぎないことに心を痛め、「幼心に是非ともお国のためにお役に立ちたい一心から」の行動だという。同校の富山訓導は「学校で満州事変の講演会を催したところ全校の生徒はいたく感激しました、その内でも：五名は全く自発的に飛行機の献納を思ひたち小遣ひを貯金して集めて持つて来ました。：海軍への話でしたので私が世話をした次第であります。」と述べている。

満州事変一周年にむけて、当時の日本が盛り上がるのが九月一八日前後であつた。この時期が教育上大きな意義があり、社会的なアピール度も高いという計算が全教連にはあつた、と推測できる。

(2) 上沼久之丞の日満教育提携―平和使節と出征軍人―

学童使節を主導した上沼には、お互いの国を対等に認めた上での、子供達による親善交流という日米人形交流を提唱したシドニー・ギュリックのような視点はない。彼がいう「日満教育提携の骨子」とは、確かに学童の交流などとおして、両国が「教育を通して、相互に正当なる認識を進め、国際的感情の融和を図る」ことであつた。⁽²⁹⁾ しかし、その国際とは何を意味するのだろうか。

教育史の先行研究によれば、戦前の日本は「世界平和への寄与、国際

社会への文化的貢献」を強調しながら、一方で欧米列強との国際競争に勝ち抜くために世界のなかで「いかに指導力をそなえた国になるか、という悲願にみちて」いた。従って国際教育の主流は、国家主義的なイデオロギーを後ろ盾に对外発展を目指すものであり、その手段として大正新教育が位置づけられると指摘する。「東京府下公立小学校内部で新学
校指導者としての役割を果たした」上沼は、まさにその延長線上にいる人物⁽⁵⁵⁾だろう。

昭和五年に設立される新教育連盟日本支部の発足や活動に重要な役割を担った上沼の当時の思想や研究活動は、「競争意識による対外観を基礎とした膨張主義や発展としての『国際化』とは一線を画す」平和的共存を希求する「国際化」が確認できるとされる⁽⁵⁶⁾。だが全教連及び東京市小学校教員会の中心人物として、日本学童使節の結成に指導的な役割を果たす上沼の一連の行動をみるかぎり、それはあたらぬ。

上沼の考える学童使節の平和の目的は、例えば危険の多い満州に派遣する学童の安全に関する、次のようなエピソードに集約されている。

すなわち八月末から九月上旬にかけて奉天付近に匪賊襲来の報道があったので、全教連地方支部の金沢・仙台・高知などから、予定通りに決行するのか、という問い合わせがあった。万が一のことを考え陸軍省に相談に行ったところ大笑いされた。「東京だつて強盗や人殺がある。それより安全な位だ。そんなに心配する位なら満州に居る人がない筈ではないか。」心配無用と丁寧の説明された。そこでこの経緯を各地方支部に知らせ、それでも心配なら「見合せらるるも苦しからず」と書いて本部の決意を述べた。そして上沼は、次のように記している。

(不可抗力で何かあれば責任を問われても仕方がない)万全の策を
尽して遺漏なきを期して人事を尽して天命を待つ外ない。平和の
使節であるが 覚悟は出征軍人の意気で 運命を神様に托して行

くのだ。どうか使節の関係者も此の心持であつてほしい。監督者は全力をささげ万全を期し 親身の心持で 運命を共にし 信頼に背かぬ行動をとりたい。多少の不満はあつても無事に使命を果たしたい。無事 無事である事が最上の喜びである⁽⁵⁷⁾。

学童使節が日満親善をめざしている限り、それは国家間の平和的共存が前提になる。日本学童使節が平和使節であることは、その意味に於いてである。しかし「覚悟は出征軍人」なのだ。それは日本が英米と対抗して対外発展をめざす以上、満州国は日本の生命線であるからだ。上沼にとって、この二つは矛盾しない。

(3) 新桃太郎主義と満州国

彼が主張するのは「新桃太郎主義」であった。「日本人は鬼退治をして宝物を積んで帰り、錦を故郷に飾るが、平和の生活戦線でも、出稼ぎに金が貯まれば、送金したり、帰国してしまひ、移民として安住定着しない。」これは短所であり、「勝つて宝物をもつて帰らない新桃太郎の意気」が必要だ。「内地の国民教育上にも、新桃太郎主義の啓培に、一段の努力が緊要となつてきた⁽⁵⁸⁾」。それは満州国に王道楽土を建設するために、日本を忘れて満州国人として尽す意気のある人材の育成だ。日本の膨張と対外進出を担うことを期待された子供たち。彼らが将来アジアの盟主として他国を指導して英米との競争に打ち勝つ人間として成長する。ここに日本学童使節の本質が集約されているのではないか。

そのため「教育者の接触は相互理解に最も有効だ」が、それは「幼稚な満州国教育」に接することで、進歩した日本の教育がかえって参考となるべき資料が多いからだ。従つて「自然指導的立場となると思ふが、親善関係から云へば、日満教育提携の骨子は相互に理解して、両国民が内省し、改造に向かつて努力する」ことだと上沼⁽⁵⁹⁾はいう。教育の面でも

満州国が近代国家になるように指導することにあり、そのための学童交流であった。

それは『大毎』編集顧問の西村真琴をはじめ引率者も基本的に同じである。学童使節の出發を送る横浜の交歓会の席上、子供たちに次のように話したという。

となりにはけむし（毛虫）のたかつてしようがない大きな木がありました。何とかしてこのけむし（毛虫）をとりのぞきたいけれども、よい（容易）にそのけむし（毛虫）をとりのぞくことが出来ませんでした。けれどもそのわきへめばへ（芽ばえ）のよいのが出来ました。こちらには意気はつらつとしたわかめ（若芽）がたくさんあります。どうしてもこんなけむし（毛虫）のたかつた木よりも、日本のようないきほひのよい苗木を、そのあたらしい地へうえつけて、ますますそのびてゆくことをいかなければならない、といふことを（西村先生は）述べられました。⁽⁶⁰⁾

この話を作文に書いた関東代表関根浪子は、その意味を次のように理解したという。

それは日満親善であつて、支那といふ老大国は今けむしがたくさんたかつてしまつてゐる国である。ところで日本のようなのんびりとしたいきほひのよい苗木を満州へうえつけ、さかへゆくことをながめ樂しまうといふことで、それがとりもなほさぶ東洋の平和といふことになるのではないか、ぜひそうしていかなねばならぬ。又そうしてゐなければならぬ、と云ふ意味であると思ひました。⁽⁶¹⁾

また監督者の船場小学校訓導の田村千世子は、神戸から大連に着くま

での船の上で、劇「筍の春」を創作し、旅行中に使節たちは劇を練習し、安東の歓迎会で披露している。横浜代表渡辺幹子は、そのあらすじを次のように紹介している。

満州の筍が地上に出たい出たいと思つて居りますが、寒い西比利亜（シベリア）風や 満州の深い雪や黄土のために出ることが出来な
いで居ります。そこへ暖かい日の光が射し、春雨がふりそ、い
たので、筍がニヨキニヨキと生へ始めると云ふのであります。そこ
で日光や、春雨や、筍や、みんなして喜びの歌を歌つて祝ひ合ふ⁽⁶²⁾

そして「申す迄もなく筍は満州を日光は日本」をさすのであつた。そして生まれたばかりの満州国を日本が守り育てるといふ意識は、しっかりと学童使節以外の子供たちの胸にも刻み込まれていた。

（4）子供達の国民的使命——赤ん坊の国を育てる日本——

鹿児島代表山口文二の歓送会に寄せられた歓送文を『大毎鹿児島』（九月一四日）は紹介しているが、例えば次のようなものがある。

：満州国は我が国に最も関係の深い隣の国です。今まで吹いた血なまぐさい嵐からヤツとこの前、生まれたばかりの国です、それだ
だ赤ん坊の満州国は危険です、それを大切に育て上げねばならぬお
守役は日本です、この大切な時に日本の少年を代表して使いをする
君たちの役目は実に重大です山口君、僕は君がこの重大な責任を
立派に果たしてこられることを信じてゐます（「責任は重大」高一
瀬田信行）

（日露戦争以来二十億の国費と十万の軍人の血を流して守ってきた

満州は)今に至るまで心血をそそいでその開発に努めて来たところである、かういふ歴史上の關係がある上に満州はわが国防上からも、経済上からも極めて大切な場所である、君がこの満州国との親善といふ重大な任務を十分果たしてかへつてくれることを心から願ふ(「真剣な努力」尋六 志水澤治)

そして学童使節、九州代表山口文二も帰国後の感想文に次のように記している。

：満州国の建国は、赤坊の出産と同じことであつて、しかもその赤坊は丸々と太つてゐるのであります。即ちそれは、鉱産物、農産物、水産物等は無尽蔵であつて、たとへ我が国が他国から絶交されても満州と手を握り互ひに助けあつてゆけば、「衣食住」には困らないのであります。私共はこの丸々と太つた赤坊を弟のやうに思つてりつばな国となし、ますます日滿の發展の為に力をつくしたいと思ひます。⁽⁶³⁾

満州国は赤ん坊でありそれを庇護することが、日本の使命であり、そのための学童使節であつた。前述のように山口が発見にあたり見送りの人々に「使命を果たしてきます」と誓つた言葉の本質はここにあつた。親善とは「親しんで仲よくすること」だが、日滿親善は対等ではなく、上下関係でこそ成り立つ親善交流であつたのだ。

別の歓送文には「日本兵隊さんに出会つたら、今までしつかりと東洋の平和を守つて下さつたことを、僕達に代つてお礼をいつて下さい」「努力を願ふ」尋五榎原友博『大毎鹿兒島』九月一四日)とあるが、満州への侵攻は東洋の平和を守ることであり、その意味での平和の使節が日本学童使節であつた。

満州国は日本が守らねばならない赤ん坊だという意識は、新聞や教育現場だけではなく、少年たちの身近にあり、ある意味では最も影響力が強い、少年雑誌にも連動している。当時絶大な人気を誇つた少年雑誌『少年倶楽部』に連載された昭和七年九月号の山中峯太郎『大東の鉄人』は、まさに学童使節の訪滿の時期に発売されている。

『満州国はまだ赤ん坊だ』と、我が本郷義昭は言つた。生れたばかりの赤ん坊のやうな国が、満州国だ。しかし、この赤ん坊は、大きくなると、えらくなりさうだ。石炭、鉄、金、石油、鹽、そのほか、米も、豆も、小麦も、満州国は赤ん坊だが、色んなものを持つてゐる。この赤ん坊を、大事に守つてゐるのは、我が日本だ。日本と満州は仲よく一緒に榮えて行かうとする。ところが、日本が榮えて今よりも強くなるのを、むやみに恐がつてるのは、第一に米国だ。第二に支那、ロシア、英国、皆が恐がつてゐる。そこで満州国を今のうちに、つぶしてしまつて、日本を弱くしようとする。しかし、戦争すると、日本は強い。だから、戦争なしに、秘密のうちに満州国を倒してしまふといふ、すごい計略をたてた者がある。この者たちが、満州国第一の都会ハルビンに、幾人ともなく隠れてゐるのだ。(第一九卷第九号、九二頁)

このような意識は教育現場だけでなく、フィクションも含めて社会全体で子供達の胸に刷り込まれたのだらう。丸山真男は、ナショナリズムに不可欠の構成要素として、(一) 国民的伝統、(二) 国民的利益、(三) 国民的使命をあげ、三つが合成されて国民的個性觀念 (national character) が打ち出される⁽⁶⁴⁾、という。これを児童文学にあてはめると日露戦争後に思想的に完成されたとされるナショナリズム児童文学は、また第三の部分がかけてゐる。それが文学として完成するのは満州

事変後の『少年倶楽部』を舞台として登場する作家たちの作品であり、なかでも「さまざまな意味でもすぐれており、ナシヨナリズム児童文学として典型的である」のは山中峯太郎だ、と児童文学研究者の上笙一郎は評価する。⁽⁶⁵⁾ たしかにこれを見るかぎりアジアの盟主である日本人を中心とするアジア建設という「国民的使命」が学童使節ばかりか、小学校高学年の多くの子供たちにも共有されているようだ。⁽⁶⁶⁾

最後に、上沼の総括の言葉を紹介しておこう。

「遂に大人は子供に勝てず」

新京に於ては 学童使節の効果に対して、大人より以上であると好評を得た。子供のかん高い声で 挨拶や慰問の言葉を述べると 殆んど全部のものが感動した結果生まれたのが「遂に大人は子供に勝てず」といふ新語である。満州へは多方面の人々が入つて居る。利権屋も行つてゐる。利権屋などに対する警戒心から見れば 学童使節に対しては平安である。子供は純真で可愛い。挨拶を聞き乍ら 喜びの涙にむせぬものはないのであつた。

：（学童使節は）全国八百万の学童に 日満親善の過程を充分に味はしめた。日本の国際的地位を明確にした。満州の平和は日本の安全だ。東洋の平和だ。世界的の平和に貢献するのだ。やがて支那とも平和にすべきだ。人類の幸福増進に寄与するのだ。使節の使命は重かつた。それを果たしたのだ。将来にも貢献すべき使命を持つて居る。：使節よ健在なれ。すくすくと伸びよ。満州に植えた平和の種を見守つて 水を与へて成長せしめよ。虫ばむものがあつたら払いのけよ。それが親木のつとめだ。健在なれ学童使節よ。⁽⁶⁷⁾

満州国を虫食むものがあつたら払いのけること。つまり中国や米国を

はじめとする欧米列強を払いのけることが親木である日本のつとめであり、それを将来担うのが学童であつた。上沼をはじめ全教連にいわせれば、それが東洋平和であり、世界平和につながるのだ。

おわりに

昭和七年六月下旬、訪日した満州国少女使節への報道合戦を制するイベントの一環として、七月一日に発表されたのが大毎・東日主催の「答礼少女使節」の計画であつた。すでに子供を中心とした催しは新聞社にとつても、世間の注目を集め部数拡大が見込める事業であつた。

またそれと並行して、民間の小学校教員団体である全教連による少女使節の答礼計画があつた。全教連は、全国規模の小学校の教員組織と称し、文部省の支援をうけてはいたが、その実情は東京を中心とする一部の地域の現職小学校教員による民間団体にすぎなかつた。ただし同会は文部省に盲目的に追従する、いわゆる御用団体ではなく、率先して現場の教育者の立場から日満親善運動を展開し、国や社会にむけアピールするという行動を取り続けている。

特に満州国建国宣言にさいして、いちはやく日満教育提携を模索し、学童の交流や使節団の派遣などを計画している。そのような時に、満州国承認の気運を盛り上げるために満州国少女使節が来日する。彼らは子供による答礼計画を東京市や外務省に訴えるが、行政側は未承認国家であるために実行に消極的であつた。そこで全教連が主体となり外交問題のない私設団体の立場から、教育親善の子供使節を提案するのだ。

さらに大毎・東日主催の「答礼少女使節」の計画を知ると、新聞社側に合同主催を申込む。新聞社側は手間や責任を負うことなく、ニュースソースを独占できる利点も考え、合同主催に合意し、その結果、使節の人選や引率等、子供達の現状をよく知る全教連主導のもとに答礼計画が

進展する。そしてその目的も、日満の子供親善と「在満将士ノ慰問、戦没将士ノ慰霊」、朝鮮の児童交流へと全教連の案にそって拡大し、さらに出発直前に満州国が承認されたために、建国祝賀を兼ねた「日本学童使節」へと発展するのだ。すなわち少女使節の答礼計画は、大毎・東日案を呑みこみ、小学校教員の任意団体である全教連の実質的な主催事業へと変化したといえるのである。

民間の教員団体の発案にはじまる親善計画は、使節に選ばれることは母校や地域の名誉として、地方を中心に異常な盛り上がりを見せる。そして新聞社の参入と国の協力のなか、民間交流という枠を越えて政官民が一体となったイベントとして一人歩きをはじめ。学童使節は、非公式に日本を代表する使節となり、国民レベルで注目を集めるのである。日本の子供達のメッセージを託した一五万枚の絵葉書が、直接満州・朝鮮の子供達の手が届くなど、学童使節によって満州国とその周辺の外地（関東州・朝鮮）の子供達による親善交流も実行された。しかし、この計画の主宰者ともいえる上沼久之丞をはじめとする全教連や新聞社側には、日米人形交流を提唱したシドニー・ギューリックのように、お互いの国を対等に認めた上での相互理解と世界平和をめざした子供達による親善交流という視点はない。それは日本対満州国という上下関係の上で成り立つ平和と親善であった。

例えば、上沼のいう「相互理解」とは、教育の面でも遅れた満州国を近代国家になるように日本が指導することであった。彼は世界平和や国際社会への文化的貢献を強調するが、その一方で欧米列強との国際競争に勝ち抜くための人材の育成を志していた。学童使節が日満親善をめざしている限り、それは国家間の平和的共存が前提になる。日本学童使節が平和使節であることは、その意味に於いてであった。しかし使節の「覚悟は出征軍人」である。なぜなら日本が英米と対抗して対外発展をめざす以上、満州国は日本の生命線であるからだ。

上沼の目指すのは、日本を忘れて満州国人として尽す意気のある人材の育成だ。日本の膨張と対外進出を担うことを期待された子供たち、彼らが将来アジアの盟主である日本人として満州国をはじめ他国を指導して米英との競争に打ち勝つ人間として成長すること。日本のアジア支配を正当化する国民的使命を自覚して、学童使節は満州国へ旅立ったのである。そのための日満親善であった。ここに日本学童使節の本質が集約されている。

誕生したばかりの満州国を守り育てることは日本人の使命であり、アジア人のためのアジア建設こそが東洋平和、そして世界平和につながるという国民意識を学童使節をはじめ小学校高学年の多くの子供達は共有していた。昭和七年の時点で、満蒙は日本の生命線、という意識は、子供の胸にもしっかりと刻み込まれていたのである。

さらに「平和の使ひ」「純真なる十五名の使節」「子供の手で平和を誓ふ」の語が踊るように、大人社会の謀略を覆い隠す子供というイメージの利便価値が、日満の両政府をはじめ社会的にも浸透していた。大正期に近代化のアンチテーゼを含む文学上の主題として見出されたのが純粹無垢という子供観であった。それは墮落した大人の対概念として理想化された子供像であり、実際の子供の姿を映しているとはいえなかった。従って、その時代意識を反映して、どのようにも変容しやすい概念であった。子供のもつ純粹無垢というイメージは、汚れなき子供たちによる親善交流、つまり平和、友好という美名に容易に結び付けられやすく、満州国建国の正当性を確認したい国民世論に受け入れられ、さらに国民の国家への帰属意識を高めることに寄与したのだ。ここでは日米人形交流の理念が換骨奪胎された形で、日本学童使節に応用されているのである。

少女使節から日本学童使節までの子供による日満親善交流をみるかぎり、満州への侵略を正当化する世論を盛り上げる文化侵略の手段として、一九三〇年前後に日本で大衆化した純粹・無垢という近代的孩子観を、

官民を問わず国民的レベルで利用したと言えるだろう。

吉見俊也は、大正期から本格化する日本のメディア・イベントは、「近代的な消費生活のイメージを大衆的に浸透させる広告装置」と「軍事的に拡張する国家戦略に大衆意識を動員していくプロパガンダ装置」の両方の側面を一貫して発展させてきたが、後者については必ずしも研究が深化されてはこなかった⁽⁶⁸⁾と指摘する。新聞社が共同主催する学童使節は、まさに後者にあてはまるメディア・イベントであろう⁽⁶⁹⁾。しかもそれは権力やマスコミなどの強制ではなく、下からの自発的な計画を発端としていた。それをマスコミが後押し、政府が協力し、さらに大衆が支持することで、相乗効果をうみだしたのである。

もともと学童使節が、新聞社をはじめとするマスコミや政府に具体的にどのように利用され、それが大衆の支持を得るまでになったのか、その過程については、稿を改めて詳しく論じたい。

【付記】 引用文には一部現代仮名遣い、常用漢字に改めたところがある。

註

- (1) 是澤博昭『教育玩具の近代―教育対象としての子どもの誕生』（世織書房、二〇〇九年）。
- (2) 日本における近代子供観の変遷等に関しては、本田和子『子ども百年のエポック』（フレールベル館、二〇〇〇年）、柄谷行人『定本柄谷行人集―日本近代文学の起源』（岩波書店、二〇〇四年）参照。なお是澤博昭『是澤優子』子ども像の探求―大人と子どもの境界』（世織書房、二〇一二年）をあわせて参照されたい。
- (3) 松村正義『国際交流史―近代の日本』（地人館、一九九六年）二二四頁。及び吉村道男「人形使節から人間使節へ―昭和初期国際交流史の一節―」（『外交史料館報』第七号、一九九四年）飯森明子「少年赤十字と東洋地方少年赤十字会議の招致―その「国際理解」をめぐる―」（『人間科学の継承と発展』上見幸司先生追悼論文集編集委員会、二〇〇九年）一〇四頁参照。
- (4) 是澤博昭『青い目の人形と近代日本』（世織書房、二〇一〇年）。
- (5) 南博・社会心理研究所『大正文化』（勤草書房、一九八七年）一一八―一二五頁。
- (6) 吉見俊哉「総説」帝都東京とモダニティの文化政治』『近代日本の政治文化史6 拡大するモダニティ』（岩波書店、二〇〇二年）一八頁。
- (7) 神野由紀「子どもをめぐるデザインと近代」（『世界思想社』二〇一一年）、『百貨店』（趣味）『買う 大衆消費文化の近代』（吉川弘文館、二〇一五年）参照。
- (8) 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』（中央公論社、一九九二年）一六六頁。
- (9) 津金澤聰廣「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化―本山彦一の時代を中心に」（『近代日本のメディア・イベント』同文館、一九九六年）、島山兆子「大阪朝日新聞社における子どものための文化事業」（同上）、『健康優良児』―メディアがつくった理想の少年少女』（『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、一九九八年）など。なおここでいうメディア・イベントは、「マスメディアが開催の主体となり、報道・販売・広告活動の拡大という目的を達成する手段や戦略として計画的に実行するイベント」という意味で用いる。メディア・イベントについては、前掲『近代日本のメディア・イベント』の他、巫坤達「メディア・イベント論の再構築」（『応用社会学研究』五二号、二〇〇九年）参照。
- (10) 是澤博昭「満州事変と子供―『大阪朝日新聞』の報道を中心にして」（『大妻女子大学紀要家政学部』第五一集、二〇一五年）。
- (11) 是澤博昭「日米人形交流から満州国少女使節へ―国際交流における子供の活用―」（『歴史評論』75号、二〇一三年）。
- (12) 是澤博昭「満州国建国と子供・少女と乙女の役割―満州国少女使節と協和会女性使節を中心にして―」（『渡沢研究』第26号、二〇一五年）。
- (13) 江口圭一「日本帝国主義史論」（青木書店、一九七五年）第五章。
- (14) 管見のかぎりでは満州国少女使節、及び日本学童使節を扱った先行研究はみられない。
- (15) 「昭和七年九月八日内田外務大臣より長春田中総領事代理宛電報」（『外務省外交資料館所蔵「満支人本邦視察旅行関係雑件」にファイル』）。
- (16) 『日本学童使節満州国訪問記』二三九―二六四頁。
- (17) 『礼教事業概要』満州国文教部礼教司、大同元年（一九三三）、六七頁。
- (18) 前掲『礼教事業概要』、六七頁。
- (19) なお『東日』は翌七月二日朝刊二面に掲載。ただし一面は全面広告なので実質は一面で記事の大きさはほぼ同じだが、内容は少し簡略されている。掲載順などからみても『大毎』本社主導で計画されたと推測される。
- (20) 全教連の歴史、および評価については、全体にわたり太郎良信「全国連合小学校教員会研究序説」（『鈴木博雄編『日本教育史研究』第一法規、一九九三年）参照。
- (21) 「全国連合小学校教員会規約」『全国小学校教員精神作興大会御親閲記念誌』（全国小学校教員会、一九三四年）三八九頁。

- (22) 前掲『全国小学校教員精神作與大会御親閲記念誌』三二九頁。
- (23) 「教育団体を描く25」『教育週報』昭和七年一月二九日付。
- (24) 「加盟団体名簿(昭和九年六月一日現在)」前掲『全国小学校教員精神作與大会御親閲記念誌』三九〇～三九五頁参照。
- (25) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』(講談社、一九五八年)三八七頁、久保義三『日本ファシズム教育史』(明治図書、一九六九年)二三四頁など。
- (26) 前掲『教育団体を描く25』。
- (27) 「教育団体を描く26」『教育週報』昭和七年二月一日付。
- (28) 明治天皇官制で、天皇が内閣総理大臣または宮内大臣の奏薦によつて任ずる官。三等以下九等までの高等官。
- (29) 例えば、昭和九年皇太子の誕生とあわせて小学校教員が天皇や国家に対して忠誠をつくす「全国小学校教員精神作與大会」の計画を全教連から提案され、それを文部省は受け入れている。開催にあたり同省は、全教連を表面上の主催者にする。だが「実施に関する諸般の仕事は實際上すべて文部省」で行い、全教連への加盟の有無にかかわらず地方に参加等呼びかけ、約三万五千の教員が参加し盛大に開催している。民間の教員団体による自主的な教育実践という形にして、実質は文部省が主導しているのである。(式部欽一「御親閲と勅語御下賜全国小学校教員精神作與大会に際して」前掲『全国小学校教員精神作與大会御親閲記念誌』三〇五頁)。
- (30) 前掲太郎良「全国連合小学校教員会研究序説」三九四～七頁、及び太郎良信「全国連合小学校教員会の成立」(『教育学部紀要』文教大学教育学部第39集、二〇〇五年)、三二頁。ちなみに昭和七年八月二三日、文部省はマルキシズムに対抗する日本教学の精神的支柱建設のために国民精神文化研究所を設置している。
- (31) 上沼については、出張一夫『廣野を拓いた人々』No1(東京都台東区立教育所、一九七七年)、『民間教育史研究事典』(評論社、一九七五年、三三八～三三九頁)参照。なお近年の研究動向は渡邊優子「新教育連盟日本支部における『国際化』―『連携』と上沼久之丞―」(『教育学研究』第八〇巻第二号、二〇一三年)が参考になる。なお富士小学校は代表的な公立の代表的な新教育実践校であった。その新教育は校長の上沼が教師の自由な研究を奨励し、若い教師がその場を積極的に活用することで展開し、学校を越えた研究交流の場を広げたと評価される。(鈴木その子「富士小学校における教育実践・研究活動の展開―昭和初期公立学校の新教育実践―」『東京大学教育学部紀要』第26巻、一九八六年参照)。
- (32) 同書を大学及び公立機関で所蔵している機関は、(筆者が確認できた範囲では)都立中央図書館だけだ。ちなみに「龍風社」は学童使節の帰国後に結成された親睦会であり、執政に献上した建国人形が龍と風で、しかも満州ではその彫刻が随所にみられることなどから、使節一行全員の投票で会名が決まったという。
- (33) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、一頁。なお一字空けの部分は原文のとおりである。以下、同資料の引用について同じである。
- (34) 同右、一～二頁。少女使節は、六月二三日全教連の本部のある東京市を訪問している。二五日は東京市小学児童歓迎会、全国教員会主催歓迎会、二六日は一ツ橋高等学校集會、市内見物、東京女子教員会主催茶ノ会、六月二七日は都下代表小学校集會などの交流など、東京市教育局庶務課の斡旋で小学校との交流を行っている。「全国教員会主催歓迎会」と表記されているが、これは全教連のことだろうか。(前掲『満州国建国と子供少女と乙女の役割』参照されたい)。
- (35) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、三頁。
- (36) 同右、七頁。なお『教育週報』昭和七年七月二三日付も同様の経緯を報じている。
- (37) 同右、六頁。
- (38) 同右、七～八頁。なお使節は、七月中に東京・名古屋・高知・仙台・広島・北海道・金沢・埼玉、八月中に横浜・鹿児島・大阪が決まった、という。
- (39) 同右、一三～一五頁。
- (40) 『東日』一九三三年九月八日朝刊8面。以下新聞の引用は、『大毎』『東日』と略記し、すべて一九三三年であるので年は省略し、『大毎』(六月二六日朝5)のように月日と朝・夕刊の別と掲載面の順に記す。なお地方版は朝刊のみの一面のため月日のみを記すことにする。
- (41) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』所収の『日本学童使節名簿』二一頁～二五頁をもとに作成。
- (42) 同右、一四頁。
- (43) 同右、九頁。なお使節たちは、翌年一一名が中学・高等女学校へ進学、一名は東本願寺の大谷家に認められ満州入りしたという。何れにして比較的裕福な家庭の成績優秀で健康な子供が選抜されたことが分かる(同右、二二三～二二五頁)。
- (44) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、九～一〇頁。
- (45) 同右、一五頁。
- (46) 同右、一七頁。
- (47) 同右、一五～一六頁。
- (48) 同右、八頁。
- (49) 「私たちの使命」『大毎』九月三〇日朝12。
- (50) 『大毎』九月三〇日朝12。
- (51) 同右。
- (52) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、一九頁。
- (53) 上沼久之丞「訪満学童使節と国民教育」(『帝国教育』六一五号、一九三二年二月)、一三頁。

- (54) 石附実「大正期における自由教育と国際教育」〔『大正の教育』第一法規出版、一九七八年〕五七〇～五七二頁。
- (55) 中内敏夫「上沼久之丞」『民間教育史研究事典』（評論社、一九七五年）三三八頁。
- (56) 前掲渡邊優子「新教育連盟日本支部における『国際化』―『連携』と上沼久之丞―」八三頁。
- (57) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、一三頁。
- (58) 前掲上沼「訪滿学童使節と国民教育」、一四頁。
- (59) 同右、一三頁。
- (60) 関根浪子「四横浜の訪問と交歓会」前掲『日本学童使節満州国訪問記』、四八頁。
- (61) 同右、四八～四九頁。
- (62) 渡辺幹子「九神戸より大連まで」同右、六〇頁。
- (63) 「『二私共が偉いのではない』同右、一八九～一九〇頁。
- (64) 丸山真男『増補現代政治の思想と行動』（未来社、一九八一年）二八一～二八二頁。
- (65) 上笙一郎『日本児童文学の思想』（国土社、一九七六年）一六八頁。
- (66) 少年雑誌と子供の関係については稿を改めたい。
- (67) 前掲『日本学童使節満州国訪問記』、一九～二〇頁。
- (68) 「メディア・イベント概念の諸相」(前掲『近代日本のメディア・イベント』)六頁。
- (69) なお前掲『戦時期日本のメディア・イベント』では「戦時期マスメディア・イベント年表(1931～1944)」(井川充雄編)がまとめられているが、学童使節の記載はない。

(大妻女子大学家政学部・国立歴史民俗博物館外来研究員)
(二〇一五年七月二一日受付、二〇一五年十一月二三日審査終了)

Recognition of Manchukuo and the Japanese Children's Mission: An Attempt to Establish Friendly Diplomacy between Japan and Manchukuo by Using Children of Elementary School Age

KORESAWA Hiroaki

Dispatched in return for the courtesy visit paid by the Manchukuo Girl's Mission, the Japanese Children's Mission went beyond mere private-sector international exchange and generated its own momentum as a public-private partnership event. Nevertheless, the organizers of this scheme did not intend to strengthen mutual understanding between Japan and Manchukuo or establish their friendship on an equal footing. They merely aimed for "peace and friendship" based on the vertical relationship in which Japan helped Manchukuo to transform from an underdeveloped to a modern nation.

The members of the Children's Mission also shared the common understanding that the peace of East Asia and the world could be realized by Japan's protecting and helping Manchukuo. When they visited the newly recognized country of Manchukuo, they fully understood their national mission to justify the control of the Japanese over Asia. The children-to-children friendly diplomacy between Japan and Manchukuo, such as the Manchukuo Girl's Mission and the Japanese Children's Mission, indicates the image of children as being "pure and innocent" that was established around 1930 was used nationwide by both the public and private sectors as means of cultural imperialism to manipulate public opinion and justify the invasion of Manchukuo.

Key words: Japanese Children's Mission, friendly diplomacy between Japan and Manchukuo, children of elementary school age, national mission, the National Federation of Elementary School Teacher Associations